

2014年度移民政策学会冬季大会@大阪大学

南米系移民2世の分化する進路選択

—— 移民ネットワーク論からみる世代間階層移動とジェンダー ——

Gendered Career-Path Selection Patterns among Latin-American Youths:

Explaining Intergenerational Mobility from the Standpoint of Migration Network Theory

一橋大学大学院社会学研究科

Graduate School of Social Sciences, Hitotsubashi University

日本学術振興会特別研究員 DC1

JSPS Research Fellow (DC1)

藤浪 海

Kai FUJINAMI kaifujinami@yahoo.co.jp

キーワード：移民2世，移民ネットワーク論，分節化された同化理論，エスニック・エンクレイブ

日本では移民たちにとってそれぞれの地域での取り組みが重要な意味を持ってきたが、地域によって、あるいは同一地域の中でもエスニシティによって、かれらを取り巻く実情は大きく異なり、画一的な取り組みでは様々な面で限界がある。目的に沿った取り組みを行うためには、何がその地域やエスニック集団の特徴なのかを理解しておくことが肝要である。ではその地域の移民の特徴をいかに捉えればよいのか。様々な方法が考えられるが、国際社会学の立場からは移民ネットワーク論というアプローチ方法がある。すなわち、移民たちがどのように移住してきたのか(=移住システム)を捉えることが、移民コミュニティのあり方に強く影響するという理論である。そしてどのような移民コミュニティを形成するのが、世代交代のあり方を含めかれらの適応過程にも影響するという事は、多くの論者によって示されてきたとおりであり、その代表的なものとしては分節化された同化理論 (Portes and Zhou, 1993; Portes and Rumbaut, 2001=2014) がある。

本発表で検討するのは、横浜市鶴見区の南米系移民2世の高校卒業後の進路選択である。移民2世については、教育社会的観点からのアプローチが多かった。しかしここでは移民ネットワーク論との接続が明確であったとは言い難い。移民ネットワーク論の観点からいかに移民2世の高校卒業後の進路選択について論じうるのかというのが本発表の趣旨であるが、さて鶴見の南米系移民2世の進路選択にはどのような特徴があるのだろうか。発表者はこれまで、鶴見の南米系移民たちにインタビュー調査を行うと同時に、地域のNPO団体や学校などで学習支援活動を行ってきた。そこで明らかになったのは、女性の2世は大学や専門学校などへ進学する者も少なくないのに対し、男性たちの中でそれらに進学した者はほとんどいないという事実であった。なぜジェンダーによってこのような差が生じるのであろうか。女性は学習意欲が高く、男性は学習意欲が低いのだろうか。本当にそういえるだろうか。

もちろん話はそう簡単ではないだろう。Portes and Rumbaut (2001=2014) は移民2世の適応について、ジェンダーによって親からかけられる期待が異なるため、ジェンダーの差異が大きく作用することを論じている。鶴見でも同様のことが言えるだろうか。移民ネットワーク論を用いて鶴見の南米系移民の特徴を捉えると、どのようにこの差を説明しうるだろうか。ごく簡単ではあるが、鶴見への南米系移民の移住システムについて説明したい。多くの南米系移民の場合、派遣業者や旅行業者を通じた移住がなされていることが明らかにされているが、鶴見の場合は様相が異なっている。鶴見の場合、理解の鍵となるのは沖縄系の人々の複数の国にまたがるディアスポラ・ネットワークである。鶴見の南米系移民は沖縄系が多く、ボリビア出身者の割合も高いことが一つの特徴となっている。この点をとっかかりとして、集住の経緯を整理したい。

沖縄からは戦前、戦後を通じて多くの国内移民、国際移民が送り出されていたことは、周知の事実であるが、

京浜工業地帯の中核たる鶴見も戦前、戦後を通じて沖縄系の人々の集住地区の一つであった。一方、ボリビアへは計画移民としての移住が戦後の沖縄からなされ、コロニア・オキナワというコミュニティを形成した。このコロニア・オキナワからは1960～70年代を通じて、サン・パウロのビラ・カロン地区や、ブエノス・アイレスへの転住者が続出した。1980年代になると、コロニア・オキナワの人々が鶴見で電設業を営む親戚を頼って鶴見に集住するようになり、その後ビラ・カロンやブエノス・アイレスにも鶴見の情報が広がり、ボリビアからだけでなくブラジルやアルゼンチンからも多くの移住者が集まるようになった。

さてここで注目したいのは、鶴見の南米系移民男性らが就いた職業である。他の地域の南米系移民は派遣社員となった者が多いが、鶴見の場合は、電設業者として沖縄系の先住者に方向づけられて電設業者となっている。当初南米系移民らは沖縄系の先住者に雇われていたが、そこで技術を習得し¹、1990年代半ばから独立し始め、現在では多くの者が自営電設業者となっている(樋口、2012)。つまり先住者としての沖縄系の日本人が、南米系移民の適応過程に大きな影響を与えていたのである。

このことは、本発表の課題である、高校卒業後の進路選択とどのように関わるのであろうか。自営業者として独立した南米系移民たちは、他の南米系移民を雇うことで経営を行っている。そこで南米系移民たちは、高校を卒業した子どもたちを自らの会社の跡取りとして考え、高校生の時点から子どもたちとともに現場で働いている。つまり男性の場合、電設業によるエスニック・エンクレイブの形成が進路選択に大きな影響を及ぼしているのである。ただし男性の若者でも父親が電設業者でない場合や母子家庭出身者も存在する。その場合には大学進学を志向したり派遣社員となったりしている²。

一方、女性の場合には、電設業が就職先と見なされておらず、男性のような明確な労働市場が存在していない。他地域の南米系移民の親は日系3世が多く日本語能力があまり高くなかったり、派遣で経済的に不安定であったりするという場合も多いが、鶴見の場合は戦後移民が多いため世代が若く日本語能力も比較的高い。派遣でないことから経済的にも他地域ほど不安定ではなく、自営業者として経済的な上昇がはかられている。出身コミュニティからネットワークが継続していることから社会関係資本も他地域に比較して多く保持している。以上のような条件に加え、女性の場合はエスニックな労働市場が存在しないゆえに、高等教育機関への進学が可能になっているのである。ただし来日時の年齢が高い1.5世の場合には母親と同じ職業(派遣・エスニック食品店)に就職したり、家族から離れて一人で南米へ帰国したりすることもある。

以上のように、鶴見の南米系移民2世の進路選択には、移住システムや移民コミュニティのあり方が深く関わっている。そしてかれらのなかで、その置かれた立場によって進路選択がある傾向を持ちつつ分化していることが確認できた。地域によって、あるいは地域の中でもそれぞれのエスニシティによって、どのような特徴があるかを正確に把握することが、地域における取り組みを実施する上で重要になってくることをこの事例は示していると言えよう。

【参考文献】

- Aldrich, Howard E., Roger Waldinger, 1990, "Ethnicity and Entrepreneurship," *Annual Review of Sociology*, 16: 111-135.
- Portes, Alejandro, Ruben G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Oakland: University of California Press. (=2014, 村井忠政訳『現代アメリカ移民二世代の研究——移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店.)
- Portes, Alejandro, Min Zhou, 1993, "The New Second Generation: Segmented Assimilation and its Variants Among Post-1965 Immigrant Youth," *The Annals of the American Academy of Political and Social Sciences* 530: 74-96.
- 樋口直人, 2012, 「鶴見で起業する——京浜工業地帯の南米系電気工事業者たち」樋口直人編『日本のエスニック・ビジネス』世界思想社, 251-276.

¹ Aldrich and Waldinger (1990) はこれをインフォーマルな研修制度と呼んでいる。

² Portes and Rumbaut (2001=2014) は、家族構成や親の人的資本も2世の適応に影響すると論じている。